

広報 ごじょうめ

発行所 秋田県五城目町役場 編集 総務課 電話(018876)代 2100番
印刷所 湖 東印刷所 電話(018876)2430番 (一部五円)
郵便番号 018-17 毎月1日・15日発行

家庭と役場を結ぶ
ミニナイ
専用電話 三七一番
この電話は町に對する、ご要望・ご意見・苦情などを受付けるほか簡易な用件もつけつけています。
〔例えば戸籍・住民票の謄抄本を何日の何時頃まで何通作っておいてもらいたいと言ふようなこと〕設置場所は秘書室で、住民課窓口・総務課へも切替えができます。
お気軽にご利用ください。

・ 秋 田 県 五 城 目 町 ・

※町政と町民をむすぶ広報紙



伸びゆく若い芽 躍動の春……清新な花の鹿を思わせる中学生のマスゲーム

これからの行事

1日 五城目町観光協会総会	午後1時 雀館公園	8日 全町農業近長会議	午後1時 役 場
1日 防犯組合総会	午後2時 消防庁舎	10日 磯ノ目土地区画整理事業計画説明会	役 場
1日～ 第10回高松宮杯東北選抜高校レスリング大会	午後1時 五 高	11日 農業委員総会	午後1時30分 役 場
2日	午後1時 五 高	13日 分館職員会議	午後1時30分 公 民 館
7日 臨時町議会	午前10時 役 場	15日 全県番楽競演会	午後7時 神 明 社
8日 体育指導委員会	午後2時 公 民 館		

おもな内容

- P 2 出稼先を訪問して里のはなしこ
- P 3 西野、岩野山、県内唯一の指定候補地に～保全林整備事業
人事異動
- P 4 私の研究

五連青は先輩の汗と涙の結晶による長い歴史と伝統を背景に育つて来た。
在町青年のすべてを組織していた過去の在り方も社会変ぼうにともなう職業の分化等と共に停滞と混沌の渦中をさまよひ、停滞は後退につながり、混沌は他の集団の進出を促す結果となり、すべての青年を集結するという、きわめて常識的な青年会の姿や、考え方も根本からくつがえされ曲り角に立たされた青年会と
言われている。
それを打破するためには自己を知り、仲間を求め、組織の輪を広げ、ねむっている青年の夢を開かせ魅力ある組織の建設に若い力を注がなければならぬ。
それがためには常に行動する中で学習し、学習の積み上げの中から実践行動する力を養わなければならない。このような学習、実践が真の青春謳歌であり、平和で豊かな郷土社会を築く若いエネルギーとなることであらう。
みんなが「青春万才」と高らかに叫べる日々を送りたいものである。
(五城目町選合青年会会長)



青春謳歌
石井 忠光



出稼ぎ先を訪問して(1)

小 熊 順 一

この度加賀谷町長の命により、二月と三月の二回にわたって、関東関西方面へ出稼をしている本町の期間従業員の方々の激励と事業面の調査を兼ねて、約二日間方々廻ってきたのでその状況を簡単にお知らせします。

一、関東地方 二月一日～一日
 東京都下四ヶ所 三三名
 神奈川県下九ヶ所 八六名
 愛知県下二ヶ所 三三名
 三重県下二ヶ所 八名
 岐阜県下一ヶ所 一七七名
 計 一七七名
 一七ヶ所中、会社関係(以下を一Aとよぶ)は、ネコス工業KK(横浜市)・プレス工業KK(横浜市)・鐘淵紡績KK(四日市市)の三ヶ所、その他の一四ヶ所(以下を一Bとよぶ)は全部土木関係でした。

二、関西地方
 河川、水道、下水等の工事関係が、宅地や団地の造成関係、道路、同郷人が同じ部屋で、敷ふとん二枚、掛ふとん二枚の夜具(之に丹

はの方はそれぞれ趣を異にしていた。宿舎の大部分は現代流行のレハブ住宅で、部屋は最低六畳間に四人から最高三六畳二人としていた。宿舎は暖房器具やテレビなどもあり、入浴施設も完備しておいた。食費は一日一〇〇円から一九〇円で不足分は会社負担であった。

昭和46年春季農作業協定賃金決る
 次のように春季農作業の協定賃金が決まりましたので農家の皆さんの絶大なるご協力を願います。
 五城目町農業委員会

作 業 名	金 額			備 考	
	男	女	共		
苗取	1,000		1,000	1日当り	
除 草					
機 械	男	女	共	1,000	〃
手 取	男	女	共	900	〃
畑 作 業	男	女	共	900	〃
薬 劑 撒 布	男	女	共	1,300	1,000
水田耕起	男	女	共	1,500	10アール当り
畑 耕 起	男	女	共	1,000	〃
水田代かき	男	女	共	1,100	1,400
耕 起	男	女	共	1,500	〃
代かき	男	女	共	1,100	1,400
田 植 機				協定なし	

※ 1日8時間労働
 ※ 耕耘機、トラクター、田植機は10アール当りとする。
 ※ いずれも賄なし

前、毛布)で大低右側と左側に床のべられ中が通路となつて、奥の機械や人夫がフルに活用され、別室の食堂で、い所が大半だった。

食事についても多くの現場では湖東出身の炊事婦さんがいた関係で、味噌汁、鰻魚、漬物等秋田料理に近いものが食膳を賑わし、家におるとあまり変わらないと言ふ所、現地は炊事婦さんの調理の場合甘味なので、梅漬、味噌漬

建、渡京組、伊藤組)が行つての愛知県北河建設現場は当方からの機械や人夫がフルに活用され、親方子方の関係もじっくりいっているようで、本場に頼もしく感じ問題の解決に役立ててほしいし、期待もしている。

二、関西地方 三月一日～二日
 大阪市内 三ヶ所 二名
 神戸市内 一ヶ所 一名
 三木市内 一ヶ所 三名
 奈良市内 七名
 計六ヶ所 四四名
 六ヶ所中A(会社関係)は、神戸日本ゼニスパイPKKと大阪不動鋼材KKの二ヶ所で、ここで寮生活は一般工員同様の待遇で、特にゼニスパイの場合はコンクリート四階建(寝室二段ベツト、各階水洗便所付)宿舎も、事務所も工場もみな一ヶ所にあり便利のよいところであった。

他の四ヶ所Bは土木関係で、やはり宅地造成関係や道路、水道、下水道等の現場であった。ここでの特長は、請負仕事が多いことと食費を雇い主が負担しており、加えて作業員の慰安計画を持っているなど好意の持てるところが多かった。

六ヶ所中三ヶ所は事業主とリグに縁故関係者が多かったためか、特に家族的なムードで楽しそうに働いておるのに感心したり、又慰労会を温泉場で開いたり、大相撲大阪場所や近くの名勝地の見物させた、事業主のサービスは総合的にすぐれておつた。



等自費で求めておる現場もあつた。食費の方は独立採算形式で、最低三〇〇円～五〇〇円当人負担となつていた。

作業面でも大部分の現場は、世話役(現場では係長)が、本町の人か、付近町村出身の人達で、一緒に働らく人もほとんどが友人か知人といつた具合で、県内の土木現場と変らないムードなので異郷の地と言う感じではなかつた。

ただ私の行った二月初旬頃は、毎日晴天つづきで休日がとれない現場、又賃金の手取りがない現場、又反面残業あり、請負ありで、来年々では是非働きたい現場等様々であった。特に本町から土木の三業者(南秋土

「また古川町さ飲むに行つてきた、このカマドや。」といつて男であれば一、二度ならず親から叱られた覚えがあると思うが古川町というのは、飲屋街の代名詞であり、飲屋街を語らずして古川町はあり得ない。

現在は、人口五一〇人、戸数一正十の大火世帯の町であるが、大正十年十月十三日の大火でほとんどが焼けた、いまの町内は大火後に形成されたものである。

大火前の町内区画は現在とはかなり違つてゐる。湖東印刷所前の道路はなかつたし、本通りの西側には今の猿田風呂屋の小路のほか細い小路二本が赤いチョウチンの「だるま屋」までの間にあった。また藤井氏宅脇から「房の家」別宅附近に抜ける間道があつたし、飲屋街の道路は全然なかつた。大火の経験から学んで、新設し、あるいは披巾されたのが現在の道路である。

遊びの方は茶を飲むだけの三人一組位といつた、いわゆる中での雰囲気だけを味わつてから「ちよつと時間三五分、それから「ちよつと遊び」今では共に「オートタイム」五十銭、一夜を共にする朝帰りの玉代は一円であった。いずれも大正八年頃の代金であるが、当時にしてはやはり大きい金であった。女郎すなわち芸者であり、今のように地に落ちた醜態もさうだつて、それで飯を食う意地とさうであった。芸者が親方衆へ出掛るときは引き衣を着、衆目の集るところを誇りにしてい

里の話し

古川町 (七)

石川 富 司

に散在していたわけである。當時は、はきり女郎屋であり、公娼の場であった。夜ともなると若者が道路が狭いほどソロソロ歩き、ある者は目的を果たすために「くるわ」に上り、三味線がさんざめき、唄が町を流し、時には「流し」があつたり、まさに古川町の夜は宵祭のような人の交錯であつたという。なるほど古川町という代名詞がびつたりである。

当時、女郎屋は九軒あつた。つや、は今の菊地タパコ屋附近「喜楽」は川村茂次氏宅附近、「仲よし亭」は越後氏宅、「巴屋」は松屋商店の手前、「笑富亭」は山口倉造氏宅、「あけぼのや」は栗山豊店の手前、「たまたや」とともに田原下駄屋附近として、「武蔵屋」はその向いであつた。女郎の数は、多い方で五人、少ない方で二人はおり、常時三〇人以上の女郎が毎夜男をさびらけていた。ほかに小さな飲屋が数軒あつた。

遊びの方は茶を飲むだけの三人一組位といつた、いわゆる中での雰囲気だけを味わつてから「ちよつと時間三五分、それから「ちよつと遊び」今では共に「オートタイム」五十銭、一夜を共にする朝帰りの玉代は一円であった。いずれも大正八年頃の代金であるが、当時にしてはやはり大きい金であった。女郎すなわち芸者であり、今のように地に落ちた醜態もさうだつて、それで飯を食う意地とさうであった。芸者が親方衆へ出掛るときは引き衣を着、衆目の集るところを誇りにしてい

大火前の飲屋街は、いまのように団地をなしてなかつた。本通り

